西油山林道周辺の散策

―西油山林道周辺の食草木及び歴史―

西油山林道は油山山頂（標高 597m）登山の登り降りのルートの一部である。西油山林道からの“りんどう峠”は別のルートである徳栄寺裏からの登山道からも通じている。西油山林道は油山登山の人、荒平山（標高 394.9m）登山を林道経由で行く人、林道周辺の食草木を採取する人、健康のため自然の風景や歴史的景観を楽しむため一定の距離を歩く人等々の目的のため利用されている。ここで取り上げるのは。まず、西油山林道の春夏秋冬の季節に確認できた自生の食草木を表 1 に掲載する。なお、掲載した食草木は参考文献〔６〕、〔９〕およびウェブ（Web）で食できるかどうかを確認している。ただし、林道のどの場所に食草木が自生しているかは乱獲を避けるために散策する人それぞれが見つけられたい。つぎに、西油山林道周辺にはどのような史跡が存在するかを示す。林道周辺の史跡は天福廃寺、西油山古墳群、妙見山徳栄寺および中島徳松翁の胸像等である。さいごに、天福廃寺と同時期に存在していた首羅山（白山）の中世寺院あとについて提示したい。

１．西油山林道の食草木（木の実等）

西油山林道の距離は入口から片江展望台への分岐の終点まで 4.543 キロメートル（km）である。ここで取り上げるのは入口からりんどう峠（標高約 316m）まで約 4km の食草木（木の実等）である。西油山林道マップは参考文献〔18〕の 3 頁を参照されたい。

表 1. 林道の食草木と手済みの時期

食草木（木の実等）	手による採取時期
わらび（蕨）	3月下旬～4月中旬
ウド（独活）	3～6月
タラの木（タラの芽）	3～5月
カラスウリ（烏瓜）	10～11月
ユキノシタ（雪の下、雪の舌）	5～7月
ムカゴ（零余子）	9月中旬～11月中旬
野イチゴ（野苺）	6月前後
ヨモギ（蓬）	3月下旬
クリ（栗）	9～10月
タケノコ（筍）	3月初旬～5月中旬
破竹（淡竹）	5月中旬
ビワ（枇杷）	5月下旬～6月下旬
キクラゲ（木耳）	4～12月
ふきのとう	1～3月
フキ（蕗）	3～5月
ザクロ（石榴）	9～10月中旬
実山椒	5～7月
葉山椒	3～4月
夏ミョウガ（茗荷）	6～8月中旬
秋ミョウガ（茗荷）	8～10月中旬
ヤマガキ（山柿）	10月下旬～12月上旬
イチジク（無花果）	6～11月

表 1 は林道ハイキングで目にした食草木と手による採取時期である。ここで、手による採取時期としているのは自生の食草木を根から引き抜かないためであり、また多くを採取しないためでもある。また、「時期」は気象条件によって採取時期が多少ずれることがあるのでその点留意されたい。この表 1 はとくに 2023 年度の気象条件によるものである。林道の食草木はこれ以外のものもあると思われるが自ら探されたい。12～1 月にかけて、実がついたミカンの木も林道でみつけたが、自生のものかどうか不明であったため表 1 には掲載していない。

西油山林道は食草木の他に、季節によって、梅およびヤマザクラなどの樹木、コモチマンネングサ、クズの花および野菊などの植物、ホトトギス（不如帰）やメジロなど多くの野鳥のさえずりや鳴き声が聞こえ楽しめるところである。

ところで、食草木を採取する場合、めったにないが、落石、滑落およびマムシ咬傷などに注意する必要がある。また、イノシシおよびサルの出没などにも注意する必要もある。

西油山林道の梅の木

西油山林道りんどう峠

２．西油山林道周辺の歴史

西油山林道付近には寺院および歴史的遺構が存在している。それらは、前述の如く、天福廃寺、西油山古墳群、妙見山徳栄寺および中島徳松翁の胸像等である。

まず、林道の標高の低いところから、西油山古墳群がある[注 1)]。この古墳群は林道入口周辺から徳栄寺裏の登山道周辺までに存在している。この古墳群は参考文献〔８〕の記述に「野芥村に石窟に 25 ヵ所の鬼塚があり、穴の入口は狭く奥は広く、すべて南向きとなっている。左右及び向の正面三方にたてて、大石を天井として並べている。」とあり[注 2)]、参考文献〔４〕の記述には「野芥・梅林・油山の小高き所や山林の中に、鬼塚又は塚穴と称する古墳が多く存在している。その大きなものは八畳敷もあって広大な石で築いている。この塚から刀剣・石器・陶器・金環・勾玉などを発掘したことがあった。」とあった[注 3)]。これらの古墳群は 3 世紀半ば～7 世紀初めまでのいわゆる古墳時代つくられたと思われる。西油山古墳群はその後鬼塚といわれるようになっている。それは鬼のような風貌の修行僧があら

われたことに由来している。これに加えて、現在の油山川は昔「にごし川」といい、往昔（おうせき）西油山に三百六十坊の食用米の食用米を磨ぐ液汁が流れてくるとので[注 4)]、この名が付けられたとのことである。2023（令和 5）年 7 月に福岡市にも線状降水帯が発生し西油山林道にも 2 ヵ所の崖崩れがあった。この線状降水帯は山林の中に埋もれていた多くの鬼塚（僧坊跡）を出現させている。

西油山林道入口の横の鬼塚

徳栄寺裏登山道の鬼塚

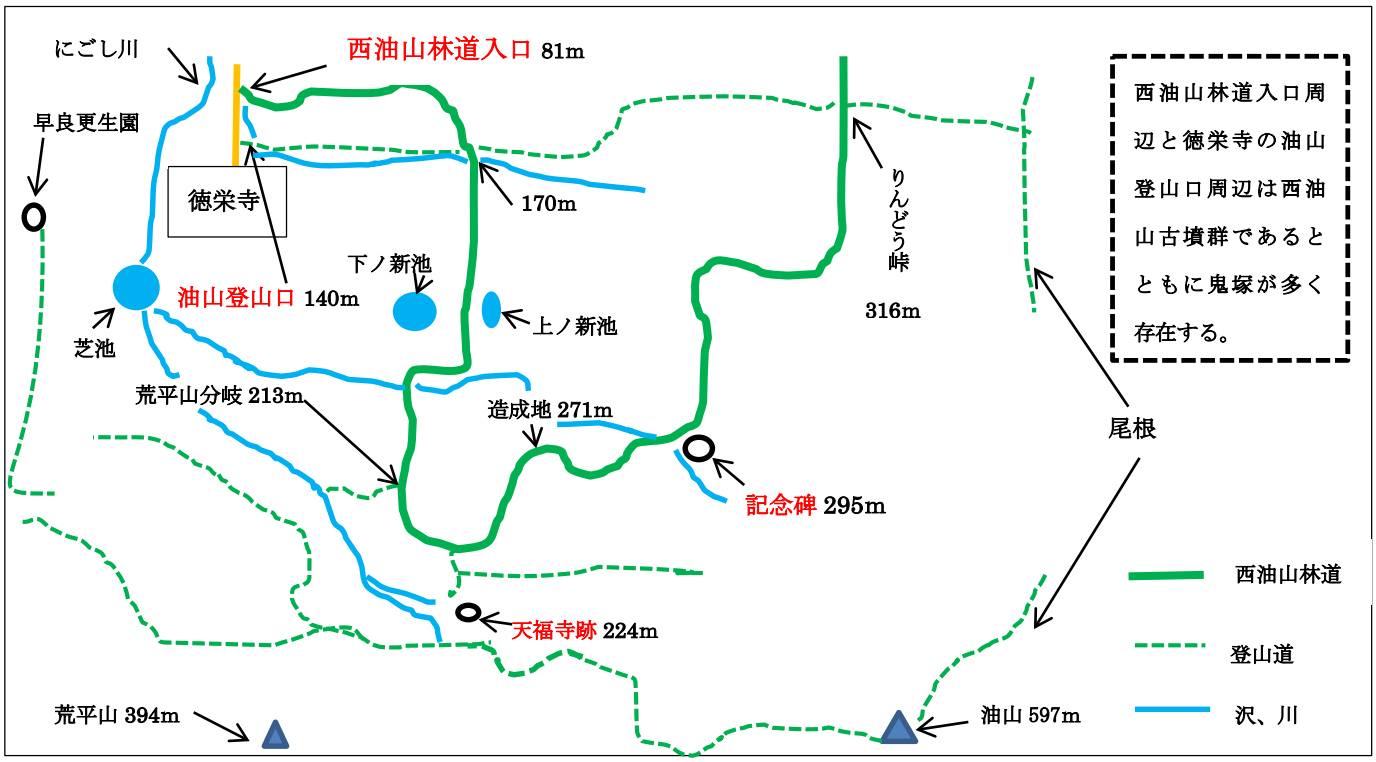
つぎに、妙見山徳栄寺は中島徳松[1875（明治 8）年 7 月～1951（昭和 26）年 2 月 10 日]が 1934（昭和 9）年に建立している。中島徳松が建立した徳栄寺は当時の佐賀県杵島郡の大町町（おおまちちょう）で佐賀炭鉱中島鉱業所（のちに高取伊好の杵島炭鉱に買収）および昭和鉱業所（福岡県宇美町）等の経営者をするとともに貴族院議員でもあった。徳栄寺の徳は徳松の「徳」と、栄は徳松の夫人である栄子の「栄」を併せて徳栄寺と名づけられている。早世した長男や炭鉱事故で亡くなった人々の菩提を弔うための建立ということである。そうした名残があったのは早良区野芥の妙見口五差路にあったタバコ屋さんには「お願い　切符は必ず停留所でお買い求めの上乗車前に車掌にお示しください：旅館　嬉野館：嬉野温泉」という看板があった[注 5)]。また、現在の福岡市中央区大名にある料亭稚加栄は中島徳松の持ち家を 1961（昭和 36）に改装されたものである[注 6)]。

妙見山　徳栄寺と紅葉

中島徳松翁の胸像

さらに、山號西油山（さんごう　さいゆうざん）天福寺については、参考文献の貝原益軒〔８〕、青柳種信［１］、奥村玉蘭〔12〕、福岡県早良郡役所〔４〕および加藤一純・鷹取周成〔10〕でみることができる[注7)]。貝原益軒以外の参考文献に記述されている内容は貝原益軒のものを超えるものではない。貝原益軒は「西油山天福寺は禅寺で、僧坊 360 坊あったとされている。今は１坊もなく、その後は竹林となっている。」と記述し、その理由として、「昔、脊振山東門寺で過失をした侍童が天福寺へ隠れ逃げ込み、これをかくまった天福寺僧徒と東門寺僧徒との間で争いが起こり、東門寺僧徒が天福寺に押し寄せ悉く焦土となり、１坊もなし。」と記述している[注8)]。貝原益軒の記述には天福寺が西油山のどの場所に存在したのか、いつごろ創建されたのか、禅寺なのか等不明な面が多い。1934（昭和 9）年に竹岡勝也〔14〕による調査報告書から、天福寺は油山北西山中の大字坊中周辺から発掘された経筒から 1120（保安元）年の銘のものがあるとのことである[注9)]。この経筒のほかに青白磁の破片、土器、青銅の小像、壺、銅鑄経筒および青城磁合子などが出土され、それらの写真等が掲載されている。そして、遺構から天福寺は禅寺ではなく天台宗に属していたのではないかと記述している[注10)]。また、竹岡氏は天福寺跡の報告書の第八図に西油山椎ノ木附近見取図を描いているがそれが何処か読み取ることはできない。場所の推測は西油山の村落（標高 76～86m）から比高差 150m（226～236m）とのことであるが、これも確定的なものではない。この場所からは博多湾から残島（能古島）を眺望できるとしている。そこで、天福寺跡は参考文献〔２〕および〔７〕の地図上に示されている場所、それと西油山林道の傍らにある記念碑からその場所を考えてみよう。

図 1.天福寺跡周辺マップ

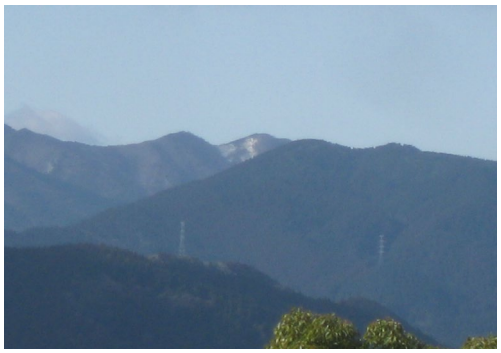


参考文献〔２〕は荒平山登山ルートの一つである早良更生園ルートから油山登山ルートへの途中に天福寺跡があると概略的に示しているが、天福寺跡へのルートは未整備としている[注11)]。参考文献〔７〕は西油山林道の一番南の方角で、荒平山分岐から少し上ったところに天福寺跡があると示している[注12)]。参考文献〔２〕と〔７〕とは天福寺跡の記述の場所は異なるがだいたい同じところではないかと思われるが確証はない。ただ、ここで示されている場所は西油山集落からの比高差 150mにあたる場所であろう。また、記念碑の付近の可能性を挙げることができる。この記念碑は、元々は西油山麓にあったが、現在の場所にあるということがこの地を訪れる人々に口伝えされている。この記念碑の裏に書かれていることは読める箇所と読めない個所があるが、表裏に書かれている安河内家の文字は、参考文献〔14〕に懸仏（かけぼとけ）、獨鈷（とっこ）および石仏断片を安河内嘉助氏、僧形石仏断片を安河内源三郎氏それぞれ所蔵されている写真を紹介している。この安河内家の記念碑が所蔵品を有す 2 人の安河内氏と関連性があるかは不明であるが、この場所周辺も西油山集落からの比高差 150mにあたる。なお、ここに述べている場所周辺からは博多湾、能古島、糸島半島の加也山、玄界島および小呂島を遠望できる。また、糸島の雷山方面、佐賀県の八幡岳および天山方面も遠望できる。

いずれにしても、天福寺跡から博多居住の中国貿易商人いわゆる博多鋼首（はかたこうしゅ）が関係する遺物が発掘されている。

記念碑（安河内家）295mこの上、伝天福寺跡

鳥獣保護区標識の上の土地参考文献〔７〕の地図上の天福寺跡



雷山および天山方面遠望

西油山林271mから能古島および玄界島を遠望

３．天福廃寺と同時代に存在していた首羅山遺跡

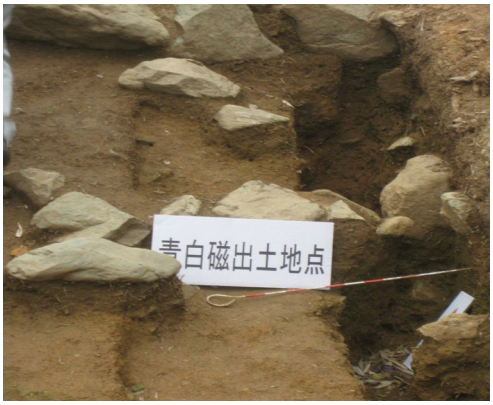
天福廃寺と同時代に存在していた首羅山の中世山岳寺院の跡について記述する。首羅山については参考文献〔11〕の糟屋郡役所編纂『糟屋郡誌』[注 12)] のなかに白山と観音堂に記述があり、参考文献〔16〕の内山敏典著「伊万里焼国内流通の歴史入門（２）」に筆者が現地説明会[2009 年 11 月 29 日（日）]で出土したときの白山神社からの山頂までの地図と写真、若干の説明を記述している。山岳寺院跡は首羅山中腹（標高 190m）からは中国・北宗期（12 世紀）の景徳鎮でつくられた青白磁刻花蓮華文深鉢（せいはくじこっかれんげもんふかばち）の断片が出土している。これは日宗貿易が盛んであった時期の博多鋼首がこの山岳寺院の高僧に寄進したものといわれ、筆立てに利用されたとされている。この青白磁刻花蓮華文深鉢の断片は東京出光博物館所蔵のものと同じものである。また、この山頂（標高 288.8m）には中国人名が墨書された国内最古の銅製四段積上式経筒が出土し、宗風獅子一対、四天王像が掘られた薩摩塔 2 基などが見つかっている。中腹の林には寺院の瓦などや僧の墓地と思われる丸い墓石が多数散らばっている[注 13)]。首羅山（白山）遺跡は 2013（平成 25）年 3 月 27 日付で国の指定を受けているおり、2018（平成 30）年度登山道の整備等がなされているとのことである。

白山神社

首羅山（白山）中腹（190m）の発掘箇所

首羅山中腹の山岳寺院遺跡跡　石垣（基壇）と礎石

首羅山中腹の古銭出土地点



修羅山中腹の青白磁出土地点

青白磁刻花蓮華文深鉢破片　北宋期　景徳鎮

青白磁の破片と中国の通貨

東京出光美術館にある青白磁刻花蓮華文深鉢

首羅山山頂（288.8m）の薩摩塔と宗風獅子

薩摩塔と宗風獅子

2009 年 11 月 29 日（日）当時の白山神社から首羅山遺跡までのルートは参考文献〔16〕の 132 頁に詳細に示しているので、それを参照のこと。

注

注 1）参考文献〔５〕の 2 頁の図を参照。

注 2）参考文献〔８〕の 457 頁を参照。

注 3）参考文献〔４〕の 179 頁を参照。

注 4）参考文献〔４〕の 180 頁を参照。

注 5）参考文献〔15〕の 28～29 頁を参照。

注 6）参考文献〔16〕の 16 頁を参照。

注 7）参考文献〔８〕は 474 頁、［１］は 253～254 頁、〔12〕は 332 頁、〔４〕は 178 頁および〔10〕は 418～420 頁をそれぞれ参照。

注 8）参考文献〔８〕の 467 頁を参照。天福寺が廃寺となったのは東門寺との抗争の他、南朝方の菊池武光と北朝方の少弐頼国との油山の戦い[1361(正平 16)年]に巻き込まれて焼失したとのことを福岡市博物館アーカイブス No.458 油山天福寺に可能性の一因の一つとして説明されている。

注 9）参考文献〔14〕の 151 頁を参照。

注 10）参考文献〔14〕の 152 頁を参照。

注 11）参考文献〔２〕の 47 頁の図を参照。

注 12）『糟屋郡誌』には首羅山に関する記述は 19 頁の白山についてと、658 頁の久原村の観音堂の箇所に首羅山ついての記述がある。

注 13）参考文献〔16〕は筆者が 2009 年 11 月 29 日（日）の首羅山遺跡説明会（町教育委員会・九歴）に参加して執筆したものである。132～134 頁を参照。

参考文献

〔１〕 青柳種信著　広渡正利校訂，福岡古文書を読む会『筑前國續風土記拾遺（下)』文献出版社.1993 年 6 月.

〔２〕江上知恵著『ふくおか歴史の山歩き』海鳥社.2016 年 12 月.

〔３〕福岡人文社編『福岡市都市圏まちず』福岡人文社.2005 年 10 月.

〔４〕福岡県早良郡役所編者『早良郡志』名著出版社 1973 年 2 月.

〔５〕福岡市教育委員会『梅林古墳―市営住宅建設に伴う飯倉 H 遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 240 集，1991 年 3 月.

〔６〕岩槻秀明著『子どもに教えてあげられる散歩の草花図巻』大和書房.2021 年 3 月.

〔７〕城南区一区一美推進委員会編『油山へ行こう―ワンディ・ウォーキング―』海鳥社.1996 年 8 月.

〔８〕貝原益軒著　伊東尾四郎校『筑前國續風土記』文献出版社.2001 年 6 月

〔９〕金田洋一郎著　根本幸夫監修『食草・薬草・毒草がわかる野草図鑑』朝日新聞出版.2023 年 4 月.

〔10〕加藤一純・鷹取周成共編　川添昭二校訂，福岡古文書を読む会『筑前國續風土記付録（中巻)』文献出版社.1977 年 12 月.

〔11〕糟屋郡役所編纂『糟屋郡誌』臨川書店.1924 年 3 月.

〔12〕奥村玉蘭著　田坂大蔵校訂，春日古文書を読む会『筑前名所図会』文献出版社.1985 年 12 月.

〔13〕昭文社編『スーパーマップル　福岡市詳細道路地図』昭文社.2001 年 1 月.

〔14〕竹岡勝也著「西油山天福寺址」『福岡県史蹟天然記念物調査報告書』第 9 輯福岡県.1934 年 3 月.

〔15〕内山敏典著『早良逍遥マップ記―歩いて歴史を訪ね、未来に繋ぐ―』城島印刷有限会社.2003 年 12 月.

〔16〕内山敏典著「伊万里焼国内流通の歴史入門（２)」『柿右衛門様式学―“やきもの”の技法と歴史及び美―』九州産業大学　柿右衛門様式陶芸研究センター．2011 年 7 月.

〔17〕内山敏典著『西油山および荒平山周辺の歴史散策マップ記』地域史と統計処理のさわらラボ.2020 年 7 月.

〔18〕内山敏典著『油山散策ルートマップと起点となる地点の写真』地域史と統計処理のさわらラボ.2021 年 7 月.